会頭講演

現代中医鍼灸はどのように日本に導入されたか

浅川 要

東京中医鍼灸センター

要旨

日本に「現代中医鍼灸」が導入され，50年近くの年数を経た。私もその初期から，導入にかかわってきたので，そのあらましをここで明らかにする。

1．1960年代邦訳の現代中医鍼灸関連書は『中国漢方医学概論』である。原書『中医学概論』は，南京中医学院が編纂，各地の中医学院試用教材として1959年に人民衛生出版社から出版された。『中医学概論』は新中国成立後，系統的に編纂された最初の中医教材である。鍼灸の内容は少なく，経穴説明も，「(穴位および取穴法)（主治)」のみ。また『中国漢方医学概論』の翻訳は，愛知大学と二松學舎大学の学者が担い，鍼灸部分は，丸山昌郎（医師）の助力のみである。

2．中国で文革が始まった1966年以降，伝統的中医鍼灸は反動的・封建的などと非難され，陸瘦燕など多くの中医師が失脚した。文革時代に鍼灸は，かなり簡素化された。邦訳された『はだしの医師 教材』（三景書店刊）でも，鍼灸の内容が少なく，経穴の記載では，項目がなく，部位と深刺の鍼法のみで主治はない。

3．文革時代に江蘇新医学院が『中医学』を編纂し，1972年に出版。江蘇新医学院は南京中医学院と南京医学院が合併したもので，後に南京中医薬大学へと発展。南京中医学院は現代中医学の礎を築いた学校である。『中医学』の下篇部分「針灸と新医療法」だけをわれわれ鍼灸師グループが翻訳し，刊々堂から『中国の針灸と新医療法』と題し出版。本書は経穴に対し『はだしの医師 教材』より詳しく，位置・主治・刺鍼法を記すが，経絡の扱いはやはり僅かに留まる。また，耳針・手針・頭皮針などの新針療法にかなりの紙面を割く。

4．上海中医学院編『針灸学』は文革時代の1974年に刊行されたが，その底本は1962年で，文革以前の中医鍼灸の内容を踏襲。本書は経絡篇を設けた経絡学説の体系的な記載を特徴とする。それまでの鍼灸書の多くが経穴の添え物的な経絡の示し方であったのに比べて，経絡学説の重要性を際立たせた。また，経穴の記載項目で（主治）とは別に（効能）を設けている。この効能は，なんらかの手技で生じる経穴の作用を概括したものである。同書の邦訳は浅川要・井垣清明・池上正治・村岡潔の4人が担い，1977年に刊々堂から同名で出版。本書によって

現代中医鍼灸のすべてがはじめて日本に導入されたといえよう。

5．天津中医学院と学校法人後藤学園の共同執筆による『針灸学』（三部作）は，刊々堂刊『針灸学』から20年ほど経た1990年代に出版された。北京中医学院の留学から帰国した兵頭明氏が中心となって編纂された。現代中医鍼灸学のほぼ完成された形にまとまっており，日本の各鍼灸学校のサブテキストに十分，対応する内容である。

キーワード：現代中医鍼灸，日本導入，現代中医鍼灸書，経穴記載

はじめに

第6回日本中医学会学術総会の会頭を務めます浅川要です。

私は鍼灸師で，ここ13年ばかり東京都千代田区の神保町で「東京中医鍼灸センター」という鍼灸治療院を主宰してきました。なぜ主宰と言うのかというと，ここは個人でやっているわけではなくて，13人のスタッフ，ドクターである顧問の先生を入れると20人近くのメンバーで，集団で治療している鍼灸治療院だからです。ここでの基本的な立場は，中医学にもとづいて鍼灸治療をしていこうということです。自分たちとしては，東京における中医学鍼灸の臨床の場をつくりあげていきたいという気持ちで，この13年間やってきました。

ただ，私自身は鍼灸の免許を取ったのは1975年のことで，この13年間より前は個人で鍼灸治療院をしてきました。個人の鍼灸治療院のときも，自分なりに中医学にもとづいた治療をしていたつもりなのですが，私自身は中国に留学したわけではなくて，あくまで日本に入ってきた中国の中医学書を自分自身が翻訳するなかで，同時にそれを使って自分自身も実践していくという形で，これまで鍼灸治療に携わってきました。ですから，そういう点では，日本における中医鍼灸の初期の導入に関して，私も一部それに関与していると考えております。

日本への中医鍼灸の導入は，1990年までとそれ以降で大きく変わってくるのではないかと考えております。1990年以前というのは，だいたい中国の書物を日本語に翻訳して，その翻訳にもとづいて，それぞれの鍼灸師が自分の治療にそれを役立てていくという形だったような気がします。ところが1990年以降，兵頭明先生（後藤学園）をはじめ中国から次々と中医薬大学を卒業した留学生が日本に戻ってこられて，その人たちが中医薬大学で学んできた内容を直接，日本にもたらすようになりました。

現在，そういう方々が中心になって広めた中医学が日本の中医鍼灸の中心になっているのですけれども，それ以前はどうだったのか，この辺りのことを，今日はみなさんに会頭講演として紹介したいと思います。

さらに，日本に中医鍼灸が入ってきてすでに50年ほど経つわけですが，現在，中医鍼灸は日本の鍼灸界でどのような立ち位置にあり，さらに今後、日本中医鍼灸はどのような方向性で進まなければならないのか，といったことを次のシンポジウムでお話していきたいと考えております。それでは，1990年以前の日本中医鍼灸の内容についてスライドを使って説明していきます。

日本鍼灸界に導入された現代中医鍼灸書

1．『中国漢方医学概論』

最初に紹介するのは，私も鍼灸学校時代に勉強した『中国漢方医学概論』という本です（**図1**）。この本は，ご存じない方も大勢いらっしゃるかもしれません。初版は1965年です。原書は『中医学概論』という1950年代に出版された本です。

翻訳者は「中医学概論邦訳委員会」となっていますけれども，担当委員を見ていただくと（**図2**），1つの特徴があります。それは，この本にはいわゆる中医学に携わる人たちがほとんどかかわっていないということです。これを見ておわかりのように，鈴木択郎先生というのは愛知大学の先生です。なぜ私などがお名前を存じあげているのかというと，大修館書店から出ている『中日大辞典』の編纂責任者だったからです。と同時にこれを見てみると愛知大学が圧倒的に多いですね。さらに，二松学舎大学の先生がかかわっています。愛知大学は，東亜同文書院という戦前，上海にあった，日本のつくった学校が前身で，その関係者や同窓生が戦後につくった大学です。二松學舎大学は漢学の学校です。

図1

中医学概論邦訳委員会・担当委員

- 編訳者（編集総括委員）　中島健蔵
- 委員（翻訳）　鈴木択郎（愛知大学教授・中日大辞典編纂委員長）
- 委員（翻訳）　中沢信三（二松學舎大学・日本大学教授）
- 委員（翻訳）　桑島信一（愛知大学教授）
- 委員（翻訳）　内山雅夫（愛知大学教授）
- 委員（翻訳）　今泉潤太郎（愛知大学助教授）
- 委員（薬物用語解釈）長沢元夫（東京理科大学教授）
- 委員（編集企画）　龍野一雄（医師・漢方臨床家）

備考：鍼灸に関しては丸山昌郎（医師）の助力を受ける

図2

こういった学校の先生方が『中医学概論』という本を翻訳したのですね。鍼灸のことでいえば，「はしがき」のところに出てくるのですけれども，「鍼灸に関しては丸山昌郎医師の助力を受ける」と書いてあるように，あくまで助力なのです。さらに編集協力のところで龍野一雄先生，薬物のところで長沢元夫先生が入っていますけれども，あくまで中心は，いわゆる漢学者もしくは中国語の学者たちでした。こういう人たちがこの本の翻訳の中心だったということです。つまり，最初は日本の中医学のニーズの中から出てきたのではなくて，あくまで中国の文化の1つとして，中国医学を日本に紹介していこうというなかで，中国学あるいは漢学の先生方が手がけた本ではなかったのかということです。しかも，編集総括委員にあげられている中島健蔵先生は日中文化交流協会で，日本と中国の橋渡しをしていた人です。ですから，あくまで中国文化を日本に輸入するという活動のなかにこの本も含まれていたということです。内容は中医学の専門書なのですが，そういう認識のもとで翻訳された本ではないかと考えられます。

原書は『中医学概論』という本で，発行年は1959年，南京中医学院が出した本です。これは中医学院の試用教材といわれているものですね。中国では1950

年代に各地に中医学院ができてきたわけですけれども，その中医学院の統一的な教材をつくっていこうという動きのなかで，これが教材としてつくられました。『中国漢方医学概論』はその翻訳本です。私たちが鍼灸学校にいた頃は，中医学書はこの本しかなかったので，私自身もこれをずいぶん読んだ記憶があります。

2．『はだしの医者 教材』

中国現代史を勉強した方はご存じだと思いますけれども，中国では1966年から文化大革命が始まります。それまでの既存の価値をすべて壊そうという形で文革が行われ，それ以前にあった中医学についても非常に否定的な動きが起こってきます。そういうなかで，中国では「赤脚医生」，日本語では「はだしの医者」と翻訳されますが，「赤脚医生」が短期間に大量につくられていきます。一番短い場合だと，数カ月の講習を受けて中国各地に広がっていき，そこでさまざまな医療活動に従事しました。「赤脚医生」の養成のために出された本が，『「赤脚医生」培訓教材』です。

これを日本でも翻訳しました。『はだしの医者 教材』（**図3**）は，初版は1976年ですね。文革は1966年から1978年ぐらいで終わったとされていますけれども，その終わる頃に日本で出されました。これは最初，自費出版でした。その後，三景書店がそれを一般書籍として世に出していきます。

図3

この本の翻訳者は「はだしの医者 教材」翻訳グループというグループです。個人名が出ていないのですが，現在，北海道で治療院をされている吉川正子先生（東方鍼灸院）がホームページで翻訳にかかわったことを明らかにしていますし，また『難経』の研究をされている名越礼子先生（欅鍼灸院）もこの本の翻訳にかかわっていたと本人から聞いております。

『はだしの医者 教材』は数年かけて，最初4分冊の形で自費出版され，後に三景書店から上下2分冊の形で出版されました。この前書きの部分で，訳者たちは「自分たちは医学の専門家でも中国語の翻訳家でもないが中国の新しい医療制度『はだしの医者』に非常な興味を持ち，これは日本の現在の荒廃した医療状況のなかにあって，自分たちの健康を守るためのよい教材として大いに活用できるのではないか」と，出版目的を書いています。当時の日本は医療に矛盾が集約されていた時代だったのだと思うのですけれども，その時代に「はだしの医者」の翻

訳グループは，自分たちの体は自分たちで守るという形で，それに役立つ１つの教材を日本に提供しようということで，自主的にこの本を出版したと考えていいと思います。

原書名は『「赤脚医生」培訓教材』といい，吉林医科大学革命委員会が出した本です。文革の頃に中国各地の組織機関をそれぞれ支配する新しい権力機関として革命委員会というのが登場してくるのですが，この本も 1971 年に発行され，ちょうど文革の真っ盛りの頃に世に出た本です。

３．『中国の針灸と新医療法』

『中国の針灸と新医療法』（**図４**）は，私自身もかかわっている本です。ちょうど私が鍼灸学校にいた頃，1973 ～ 75 年頃に「ベチューンに学ぶ会」の４人で翻訳しました。「ベチューンに学ぶ会」（ベ会）は，「自分たちの体は自分たちで守ろう」「治療手段を共有化しよう」「固定的な治す・治される支配関係を打ち破ろう」をスローガンに掲げた団体です。そして，この本は最初は「ベ会」のテキスト用として，翻訳を思い立ったものです。

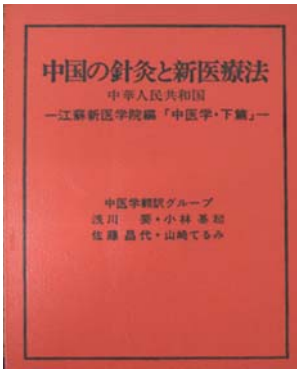

図４

出版元は刊々堂という出版社で，その後倒産してしまって今はないのですが，中国の鍼灸書をけっこう多く出していた出版社です。翻訳者のうち，小林基起・佐藤昌代・山崎てるみの３人は中国語研修学校の学生であり，私と小林基起・山崎てるみは四谷の鍼灸学校の学生でした。

この本は江蘇新医学院篇の『中医学』下篇の鍼灸関係部分（「第１章 経絡腧穴」「第２章 針灸と新医療法」「第３章 よく見られる疾患の治療法」「第４章 鍼麻酔」）を訳出したものです。原書は『はだしの医者 教材』よりも若干遅くて 1972 年で，江蘇新医学院というところが出した本です。江蘇新医学院は，1970 年に南京中医学院と南京医学院が合併してつくられた学校です。

４．『針灸学』（上海中医学院）

現在，『針灸学』（**図５**）は土屋書店で復刻されています。日本語版を出したのは 1977 年です。これも，先ほど言った刊々堂（出版社）が出した本です。

私，井垣清明（現・書道家）・池上正治（現・日本翻訳家協会理事）・村岡潔（現・佛教大学教員）の４人が中心になって翻訳しました。

Ⅳ

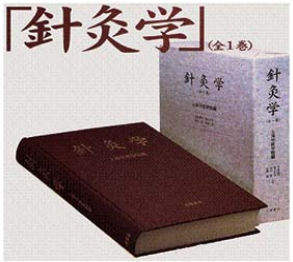

図5

原書は，1974年に上海中医学院が出した本です。もともとは1962年に上海中医学院が出した『針灸学』が底本になっていて，表紙部分に毛沢東語録などを挟み込んで出したのですが，内容的には1962年当時の中国鍼灸の内容をそのまま伝えている本なのです。

この本の特徴は後でお話しますけれども，経絡の体系がきちんと明らかにされていることです。文革時代の中国の鍼灸書は，経絡を申しわけ程度に扱うか，本によってはまったく無視することさえ起こりましたが，全４編からなる本書の第１篇経絡編はすべて経絡についての記載です。

この本は私が鍼灸学の学生だった1975年に，神保町の東方書店で手に入れたのですが，一見して強いカルチャーショックを受けた本です。日本の鍼灸学校では，経穴の位置や順番についてはけっこう細かく教えるのですが，経絡についての話はほとんど出なかったのですね。現在でも，現行教科書『新編　経絡・経穴概論』を見てみると，経絡部分についてはお飾り程度の扱いしかしていません。ですから，学校の授業では経絡と経穴が結びついていませんでした。勢い，日本ではツボ療法的な経穴主治にならざるを得ないのです。

「鍼灸治療というのは経絡・経穴にもとづくといいながら，じつは日本の鍼灸は，経穴に非常に偏っている。また中国も，特に文革時代の鍼灸は非常に経穴に偏ったものだ」と認識させられたのが本書です。古代の中国人は人体を網羅する経絡の体系を明らかにし，経穴主治を経絡の体系のなかで捉えていたのではないだろうか？　それを気付かされたのが本書です。目から鱗というのではないですけれど，これを絶対に翻訳してみようということで，私を含めて前述の４人で，３年の年月をかけて翻訳しました。

５．『針灸学』（天津中医学院＋後藤学園）

先ほど述べたように，日本の中医鍼灸の導入は，1990年で大きく線が引かれます。それまで私たちは，翻訳でしか中国の鍼灸については知り得なかったのですけれども，1980年代の後半から1990年代になると，兵頭明先生をはじめ，現・日本中医学会事務局長の瀬尾港二先生や，多くの方々が中国の留学を終え，どんどん戻ってきました。その人たちが積極的に中医学の普及に尽力され，鍼灸学校の教育のなかにも中医学が導入されるようになってきました。現在では，中医学にもとづいて『東洋医学臨床論』や『東洋医学概論』が書かれております。

写真（**図６**）は『針灸学』の「三部作」（基礎篇，経穴篇，臨床篇）です。これは1991年に学校法人後藤学園が中心になって，天津中医学院と後藤学園の共

同執筆という形で書かれたものです。ですから原書はありません。この三部作は，ほぼ完成された現代中医鍼灸学書で，東洋療法学校協会でも推薦図書になっており，私がかかわっている東京医療福祉専門学校でも，この基礎篇については学校の教科書になっています。

図６

日本に導入された中医鍼灸書の経穴に対する記載項目

次にそれぞれの本でどういう内容が書いてあるのかを紹介していきますが，全部を比較していくのは膨大な時間を必要とするので，経穴の扱い方についてだけ，それぞれの本の特徴を見ていきます。日本に導入された中医鍼灸書の経穴に対する記載項目ということです（**表**）。これは導入順に書いてあります。

最初の段は『中国漢方医学概論』です。1965 年に日本で発行されました。この本の記載項目は，穴位および取穴法，そして主治だけです。刺鍼法などについては一切書いていません。さらには穴位の解剖学的なことも書いていません。本

表　初期に導入された現代中医鍼灸書の経穴記載内容

書籍名	原書名	原書発行年	邦訳発行年月	経穴記載内容
中国漢方医学概論	中医学概論	1959 年	1965 年 12 月 10 日	（穴位および取穴法）（主治）
はだしの医者 教材	赤脚医生培訓教材	1971 年	1976 年 12 月 1 日（第 4 分冊）＊第 1 分冊はそれよりも 2 年ほど前	項目を立てていない部位と刺鍼法を簡単に記すが，主治はない
中国の針灸と新医療法	中医学・下篇	1972 年	1976 年 9 月 25 日	（位置）（主治）（附注）※（附注）はおもに刺鍼法について記されている
針灸学（上海中医学院）	針灸学	1974 年	1977 年 6 月 20 日	（位置）（解剖）（効能）（主治）（文献摘録）（配穴）（操作方法）（分類）（備考）
針灸学（天津中医学院＋後藤学園）	針灸学	1991 年	1991 年 5 月 1 日	（出典）（由来）（要穴）（定位）（取穴法）（主治）（作用機序）（刺灸法）（配穴例）（局所解剖）

当に簡単な内容しか書いていない本です。

２段目は「はだしの医者 教材」です。これはさらに項目が少ないですね。項目を立てていなくて，部位と刺鍼法を簡単に記すだけで，なにに効くかという主治については書いていません。ただ，深さだけは書いていて，総じて深刺です。ですから，睛明穴も５分から１寸５分の深さに入れろという形ですね。

３段目は『中国の針灸と新医療法』です。記載項目は，位置・主治，そして附注としておもに刺鍼法について書いてあります。でも，やはり非常に簡便な形で書いてあります。

４段目は上海中医学院の『針灸学』です。記載項目に関しては，位置・解剖・効能・主治・文献摘録・配穴・操作方法・分類・備考という形で，内容についてはかなり掘り下げた形で書いてあります。

一番下の段は天津中医学院と後藤学園が出した『針灸学』です。これついては非常に細かい記載項目が出てきます。局所解剖から，配穴例・刺灸法・出典・由来・要穴・定位・取穴法・主治・作用機序というのまで非常に細かい記載になっております。

ちなみに，日本の状況はどうだったのかといいますと，私は1972年に鍼灸学校に入ったのですけれども，私が鍼灸学校に在学していた頃に使っていた教材が『漢方概論（経穴編）』で，森ノ宮医療学園の創始者である森秀太郎先生が中心になって書かれた本です。記載項目は，取穴・解剖・主治・備考で，この備考については森先生のさまざまな個人的な経験が書いてあります。たとえば肺経の孔最穴については，「痔疾患には主として灸を用いる」といった類です。

当時の日本の鍼灸学校の教科書と，文革当時の中国の鍼灸書では，経絡経穴の記載項目は，中国の方がむしろ少なかったと思います。ところが，現在の日本の『新編　経絡・経穴概論』は，主治あるいは刺鍼法等については一切，触れていないですね。解剖学的なものについては書いてありますが，そこまでなのです。この経穴はどのような症状に使えるのか？　どのようにしたら効果が発揮できるのか？　という部分についてどうして書いていないのか，これは常々，疑問に思っているところです。これについては抄録のなかに参考資料として書いてありますので，ぜひそれをご覧ください。

そういうことで時間が来てしまいました。あまりまとまらなくて申し訳ないのですが，次のシンポジウムに移っていきたいと考えます。